主日礼拝　　2020年１１月８日（日）
題　「神のために働く光栄」
テキスト：ローマの信徒への手紙１５章：１４～２１節
（聖書の個所は最後にあります。）

パウロは長年ローマからスペインまで主イエスの名を伝えるために行きたかったのです。ローマに行くことは、なかなか実現せず、最後キリストのゆえに迫害される者として囚人としてローマに行くという生涯でした。スペインには行けなかったようです。

ところで、カトリックの聖書（フランシスコ会聖書研究部訳）では、今日の個所から後ろは「あとがき」とつけられています。信仰の中心的な内容・教えは１５章１３節まででほぼ語りつくされ、後はパウロは自分の思いをローマの信徒の人たちに語りかけているように思えます。今日の「小見出し」には「宣教者パウロの使命とつけられています。
パウロは根っからの宣教者であり伝道者でした。今日的に言えば、各地を巡ってイエスを伝える巡回伝道者であり、教会の基礎を立てる開拓伝道者でした。パウロは、同じ場所に長年留まって牧会・伝道に力を注ぐというより、主イエスの名を各地に伝えることを神さまから託されていたのです。

わたしたち神に召された信徒たちも、それぞれに神さまから託された働きがあるようです。すべての働きに、どれが上とか下とか、これもあれもできるというものでもないようです。

ただ神の働きに参加しているということで共通しているのです。
パウロは語ります。

14:兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、
互いに戒め合うことができると、このわたしは確信しています。
15:記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思
い切って書きました。
パウロはローマの信徒たちが、善意に満ち、信仰生活を送る上での

知識もあり、お互いに戒め合う、つまり考えを正し合ったり、忠告し合うこことできることを認めて喜び神に感謝しているのです。これは本当だと思います。新共同訳聖書では「かなり思いきって書いた」とあり、他の聖書の訳では、「かなりきつい事を書いた」ともあり興味深いです。聖書を読むとパウロは各地で語ったことでかなりの怒りもかったことがあるようです。

ただパウロが語ったり、手紙に書いたりする内容は、彼が勝手に思いついた

り考えたりしたことではなく、「それは、わたしが神から恵みをいただいて、」と後にあるように神さまから示されたことを語ったのです。語る力や書く力は、単にパウロの能力や手柄ではなく、神さまから頂いたものだということだと思います。その意味でパウロは旧約聖書の預言者のような存在でもあります。

パウロの告白が語られます。

16:異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。

パウロには、自分は同民族のユダヤ人たちのために遣わされたのではなく、ユダヤ人から見れば異邦人、外国人の宣教を担うものとの強い自覚がありました。その働きへの導きの声を何度も神から聞いたことが使徒言行録にも記されています。パウロの宣教、伝道の目的は、「そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。」　今まで出会った人々、パウロが語るローマの信徒の人々、これから出会う人々が、「神さまへの供え物」つまり、神さまに喜ばれる人たちに更になっていくことなのです。それがパウロの主イエスにあっての一番の喜びになっていたのだと思うのです。パウロが語った「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」とのことばを思い出します。これがパウロの主イエスにある生き方そのもであったと思えるのです。

宣教者パウロの確信のことばです。

「 17:そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。」パウロにとって、人々に誇ろうとすれば、色々とあったようですが、たとえば自分の属する民族、出身、熱心さ、などなど。それはそれで良いのですが、パウロが書いたフイリピの信徒への手紙３章８節以下にありますように、「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵（ちり）あくたとみなしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」パウロは何より主イエスを誇りとしているのです。それは、喜びであり光栄なのです。

「わたしたちは、一体何を誇りとして生きているでしょうか？」

わたしにとっては忘れられない讃美歌の歌詞があります。

讃美歌５２２番「キリストにはかえられません」の歌詞。わたしは若い時からこの賛美歌が好きでした。自分の生き方の戒めとしてこの歌のことばを聞いて

きました。今でもそうです。「世の宝、富、世の楽しみ、世のほまれ、有名なひとになること、ひとのほめることば、いかにうつくしいもの」と出て来ます。人によるでしょうが、年齢には関係ないのかもしれませんが、特に青春時代には強い思いがあるのかもしれません。皆さん、いかがでしょうか？

ただ、わたしは、ある時から２節の「ひとのほめることばも　このこころをひきません」ここに、「ひとからひなんされることばも　このこころをひきません」と思える人になりたいと思うようになりました。

牧師の働きを長年続ける中で、さまざまな聞きたくない言葉を受けてきましたが、主にあって「苦しみにあったこと、いやしめられたことは　主にあって良いことに、感謝と喜びに変えられるのです。」と少しづつ思えるようになって来たように思えます。このことは感謝であり、主の恵みだと思っています。神さまがそう受けとめれるように変えて来てくださったのです。まさにわたしに働いてくださっている御霊の、聖霊の働きです。でも今では、人からどう思われているか、見られているか、評価されているかは気になることもあるのです。肉体を持つ人間は、いつまでも人の評価が気になる存在だと思います。しかし、それは、決定的な問題ではないのです。

人からどう見られているかより、主イエス、神さまに、どう見られているかの方がはるかに重大な問題なのです。自分の心の平安が保たれるために重要なのです。本当に大切なことは、「このおかたで（キリスト）にこころを満たされているいまは」なのです。

真の喜びと平安はここにあるのです。主がわたしたちと共にいてくださる。主にあって心満たされるインマヌエルの現実です。そこにキリスト者の真の喜びがあるのです。

パウロは主イエスの恵みに生かされ、神に用いられ、当時のローマ帝国の東半分を主イエスを伝えるために回りました。

教会に招かれたわたしたちも、主イエスの福音の喜びに生かされ、神さまの働きに参加できることを感謝し、たとえ距離としては遠くに行かなくても、自分のいる場所で近くで神さまの働きに参加し、参加できることを感謝し喜びたいと願います。

◆宣教者パウロの使命

14:兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができると、このわたしは確信しています。

15:記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、

16:異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。

17:そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。

18:キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、

19:また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。

20:このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。

21:「彼のことを告げられていなかった人々が見、／聞かなかった人々が悟るであろう」と書いてあるとおりです。